

「東京・横浜」大谷石建築めぐり

NPO法人 大谷石研究会
顧問 岡田義治

2010年7月3日、大谷にある市営駐車場を出発した車は、一路東京・葛西を目指した。最初の見学は「**関口美術館**」5年ほど前に竣工した美術館で、内部に大谷石をさり気なく配し、ほかの仕上げ材料を引き立たせている。全体として簡素で清楚な小ギャラリーという感じであるが、床の大谷石がギャラリーの空間全体をまとめあげ、リードしている。竹を天井から吊り下し、手摺り替わりとした階段を上がると、2階は、ヤシの葉を編んだ肌触りの良い仕上げで、座って回遊することを意識した床となっている。外廻りを拝見すると、不動産や設計事務所を経営するオーナーの拘りで、4t車で50台分の石をふんだんに使い、6tの大谷石を使用した露天風呂がある作庭は圧巻だった。関口雄三建築設計事務所の本館には大谷石のほか、御影石、白・黒・錆・緑の大理石で造られた塙などのオブジェがところ狭しと並べられていた。



関口美術館

次に向かったのは「**自由学園・明日館**」細い路地を歩いて進み、都会の中にオアシスを発見した気分であった。あらためて木材と大谷石とを相互に対比させ、引立たせ、強調する絶妙の組み合わせを見せる設計者・ライトの見事な手法を堪能した。そして、その手法を継承し進化させたライトの高弟・遠藤新の際立った手法をも垣間見ることが出来た。建物の基礎や礎石に遺る表面の鶴嘴の痕跡も時間を越えて新鮮だった。

次に訪れたのは「**日本民藝館**」昭和11年の開館で、西館の長屋門は、明治13年に建築された。本県・日光街道沿い、野沢の中山家から移築されている。腰壁に張った大谷石を強調し、引き立たせる様な太い茶褐色の海鼠目地が印象的だった。屋根もかつて大谷地区の近郊で使用されていた大谷石瓦、格子のある窓上の庇もまた大谷石で葺かれている。全体に威風のある堂々とした門こえる。



日本民藝館

港区元麻布にある「**安藤記念教会**」は、岩倉使節団に加わり、後にハワイ総領事となった安藤太郎が大正6年に建築したもので、尺角の大谷石を積み上げ、ゴシック様式でまとめられた石造の教会建築である。バットレス（補強用の控え壁）の笠木等、雨仕舞いへの配慮が必要な部分には白河石を使用するなど、アメリカで建築を学んだ吉武長一の細かい設計の妙が見られた。教会の壁に嵌込まれたステンドグラスを設計した小川三知もまたアメリカで学び、「ステンドグラスを通して、教会の周囲の自然と四季を感じる事ができる」と伝えられている。天井の小屋根は、ハンマーヒーム・トラスと呼ばれる折上げ形で、壁面の上端の左右に梁を跳ね出し、それをアーチで支え、陸梁を省略するものと、シザース・トラス（鉄組）といわれる合掌の足元から向かい側の材の上半にトラス材を架け渡す手法が用いられている。教会建築は、天井の高さを出来るだけ高くしたい、という要請があり、一方、大谷石の壁の高さは押さえない、という事情でこのような小屋組が採用されていると考えられる。90有余年の歳月を経て、関東大震災では大谷石の一部が崩れ、補修を余儀なくされたが、今、外壁の一部は厚い蔦に覆われ、大谷石も変色しているが、石造建築の教会はますます存在感をましている。ところで、安藤記念教会では、会員の真瀬淳平さんの、創世記からはじまるキリスト教に関する大講義からはじまり、懇談会では、帝国ホテルに大谷石が採用されたのは、ライトがこの安藤教会から影響を受けた、という新説が飛び出すなど、終始和やかな話が展開された。

最後の見学地「**横浜山手聖公会**」は、横浜居留地の頃（文久3年）に聖堂を完成させた古い教会で、明治34年には煉瓦造のヴィクトリア様式の教会を完成させている。その後、米国人建築家・モーガンの設計による聖堂が完成したが、第2次大戦の戦火（横浜空襲）で焼失している。また不審火等による火災を経験し、改修を行った現状の教会堂になった。今回は、外廻りだけの見学であったが、鉄筋コンクリート造の躯体に大谷石を貼り付け、外壁全体を整層切石とした端正さ、窓のトレスリー部分を強調する石の細工の微妙さなどに、大谷石の加工性の良さが発揮されていた。圧巻は正面入口のテューダーアーチで、幾重にも奥深く刻まれて行く三方枠の連続が重厚な感じを醸しだし、大谷石に見られない異なる側面を発見した。



横浜山手聖公会



安藤記念教会

「旧大谷公会堂の移築と活用の推進運動」その後



NPO法人 大谷石研究会
理事長 小野口順久

前の県道70号線の拡幅工事が未定であることから、移転を余儀なくされる状況にもない」とのことでした。そのため、この運動は、県道の拡幅を促進する運動に切り変えて、現在は「大谷橋の架け替え要望」を推進しています。

本件については、既に本紙の第3号及び第7号で報告済みですので、多少重複しますが、ここに3度目の報告を致します。

この運動は、平成14年8月30日付、当時の福田富一宇都宮市長宛「旧大谷公会堂の移築と活用を推進する会」の名義で要望し、以来8年余を経過しています。

その後佐藤栄一市長に変わり、地元住民約5千名の署名を添えて要望を繰り返すなどし、内容もより具体的に、屋根の葺き替え工事の促進、移築場所の提言や関係地主との交渉などを行って来ました。

しかし乍ら、平成17年9月13日付市側の最終回答は、「旧大谷公会堂

前の県道70号線の拡幅工事が未定であることから、移転を余儀なくされる状況にもない」とのことでした。そのため、この運動は、県道の拡幅を促進する運動に切り変えて、現在は「大谷橋の架け替え要望」を推進しています。

要望の主旨は、
一、交通安全面として、県の基本方針は、学童等の通学道路が狭隘且つ歩道のない場所を最優先に整備するとしており、この場所はその方針に正に該当するものです。なおこの橋は昭和9年の竣工によるもので、既に76年余を経過し、老朽化も著しいものです。

二、観光面として、県は「観光立県」とか「文化を道で繋ぐ」との施策を標榜しているが、大谷地域は正にそれらに該当し、大谷の玄関口とも言える大谷橋周辺は、余りにもひどい状態であり、そのうえ橋の幅員が狭いため、大型観光バスや、消防車、救急車の運行上支障をきたしています。

三、来る3月には北関東高速道路の全線開通が見込まれ、また大谷街道周辺にスマートインターチェンジの新設も話題となっている昨今、市

共々大谷地域の全体計画の策定、旧

大谷公会堂移転先の選定など急がれる課題です。

そこで現下の財政事業不如意の折柄、工事の施工順序を現在の城山中央小学校から大谷橋に向かってではなく、逆に大谷橋から小学校に向けてすすめ、先に挙げた諸問題を解決すべく、実情にあった発想の転換を要望しているつもりです。

しかし、平成22年6月16日付の「知事にアクセス」に提言した回答では、「大谷橋の架け替えについては、関連する姿川の改修計画や県道大谷観音線の交差点改良計画について現在検討しているところであり、架け替えの実施については、これらの計画の実施時期と整合を図る必要があることから、現在は未定の状況です。引き続き歩道整備を進めながら、大谷橋の架け替えについては関係課と協議、調整及び地元関係者との調整を図りながら検討を進めて参ります。ご理解の程宜しくお願い致します。」とのことでした。

私達としては、所期の目的達成のため、粘り強く要望を続ける所存ですので、関係する皆様方のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

なお、私達のNPO法人大谷石研究会は、任意の団体から通算して本年7月には10周年を迎えます。記念事業として、旧大谷公会堂を会場にして、

一、本公会堂の設計者、更田時蔵氏の孫で当会会員でもある更田邦彦氏が中心となり、東海大学との「公会堂共同調査」の結果報告。
二、大谷地区に因んだ催し、大谷石の将来像、大谷寺の歴史などの講演を計画しています。

大谷の民話・史跡あれこれ

御止山の由来

(NPO法人 大谷石研究会理事広報担当 柏村 祐司)

大谷寺の裏山を御止山という。その名前の由来は、江戸時代にまでさかのぼる。大谷寺は、中世宇都宮氏の庇護を受けたが、慶長2年宇都宮氏の改易に伴い一時衰退を余儀なくされた。それが再興になったのは、日光山の貫主であり徳川家康の顧問的存在であった天海の弟子伝海が住職になってからである。伝海以来、大谷寺は天海開山の野野の寛永寺とのかかわりが深くなった。輪王寺と寛永寺とを兼任する輪王寺の宮が寛永寺から輪王寺へおもむく折には、大谷寺に参詣し、秋になると裏山で松茸狩りを行ったものである。そのために裏山を日光御用の山と称して、一般人の出入を禁じた。このことから御止山と称されるようになったのである。

現在では、拝観料を納めれば一般人も立ち入ることが出来る。ただし風情の良さに岩場で足をとられないようにくれぐれも注意されたい。

大谷石採掘・販売・施工
墓石・外柵・設計施工
各種石材販売・施工

有限会社 北戸室石下石材店

〒321-0345
栃木県宇都宮市大谷町1466
Tel 028-652-0506 Fax 028-652-4888

正 屏風岩

株式会社 屏風岩
BYOUBUIW Aco.,Ltd

〒321-0345
栃木県宇都宮市大谷町1088
TEL 028-652-0531 FAX 028-652-0410
http://www.ooyaishi.jp/byoubu.htm

屏風岩石蔵(栃木県指定有形文化財)